

木に触れ・感じる動的な学び舎

子どもたちが日常的に木に触れ、木の温もりや質感を感じながら過ごすことのできる、新しい学び舎を提案する。

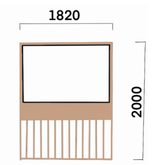
現代の子どもたちにとって、木材は「見るもの」や「建物を構成する材料」として認識されることはあっても、実際に触れ、その重さや手触り、香りを感じる機会は決して多くない。そこで本計画では、学校という子どもたちが長い時間を過ごす場所そのものに木を積極的に取り入れ、幼い頃から木に触れる環境をつくる。
木に触れながら過ごす日々の積み重ねは、単なる素材への興味にとどまらず、地域の森林や木材、さらには自分たちが暮らす土地への愛着へとつながっていく。地域で育った木が学校となり、そこで学ぶ子どもたちの身近な風景の一部となることで、「木」と「地域」と「人」とのつながりを育むことを目指す。

自ら空間をつくる「可動式木造壁」

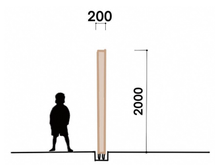
本計画では、木造の壁を固定された建築要素としてではなく、子どもたち自身が動かすことのできる「可動式木造壁」として計画する。
壁を動かすことで、教室を広げたり、学習の場を分けたり、友達と集まる場所をつくったりと、その時々の学び方に応じて空間を変化させることができる。決められた教室に合わせて学ぶのではなく、子どもたち自身が考え、動かし、組み合わせることで、自らの学習空間をつくり出していく。

そこには、木の温もりを感じながら、自分たちの手で環境をつくるという新しい学びの体験が生まれる。
「木に触れること」と「空間を動かすこと」を通して、子どもたちは建築を受け身で使うのではなく、自ら関わり、変化させ、育てていく。
木の温もりに包まれながら、学び方に合わせて姿を変える。そんな、子どもたちの活動によって日々変化し続ける、動的な木造の学び舎を提案する。

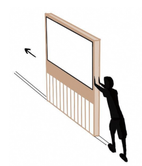
可動式間仕切り概要



立面寸法
可動式壁の上半分はホワイトボードとなっており学習の補助となる。下部分は格子とし重量を抑えている。



断面寸法
可動式壁の下には滑車がついており、溝に沿って動かすことができる。滑車で滑らかに動くので小学生でも動かしやすい。



動かし方
溝に沿って押して動かす。
滑車がついているので子供一人で動かすことができる。

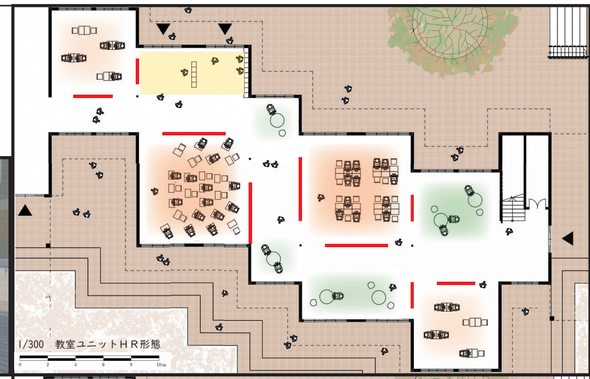
HR 式の形態

＝可動式木造壁

HR 式は下図面のように8×8の普通教室ユニットと6×6の小さめ教室ユニットの二つの空間をつくる。
壁の動かし下限によって教室をより閉鎖的にしたり、逆に開放的にしたりできるなど授業内容に合わせて変化させることができる。

＝昇降口
＝普通教室ユニット
＝個別学習空間
＝小さめ教室ユニット



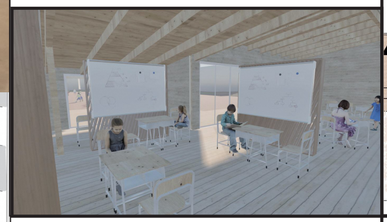


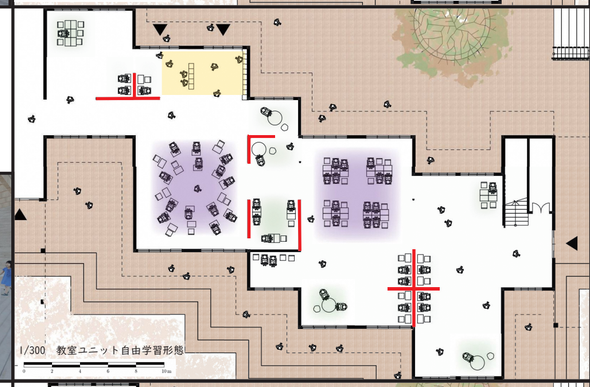
自由学習形態

＝可動式木造壁

壁を動かして角空間を造り、自ら学習机などを配置して自分だけの空間をつくる。壁は１つ2mほどで小分けになっているため複数の小さな空間ができる。
個人や少人数空間の場合は壁を囲むように動かし閉鎖的な落ち着いた空間をつくる。壁を動かすことによって逆に大きな空間も生成される。その空間は大人数で学習を行う空間として使用できる。

＝昇降口
＝個別学習空間
＝集団学習空間



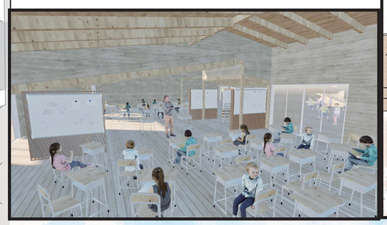


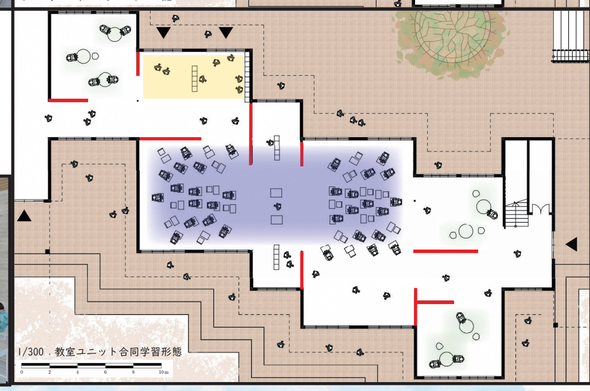
合同授業形態

＝可動式木造壁

可動式壁をあえて端に寄せることで大きな空間を作ることができ、人数の多い２学年合同の授業をすることが可能になる。
その他に、人数が同じでも教室を広く使いたい授業（調べ学習など各自作業をする授業）や、狭く使いたい授業（教員が実践し手元を見てもらう授業）で教室の大きさを臨機応変に調整できる。

＝昇降口
＝個別学習空間
＝合同授業空間





敷地：京都府のどこか（架空）
用途：小学校（6学年１クラス）
構造：木造
敷地面積：約 19200 ㎡
延べ床面積：約 2600 ㎡



＝教室ユニット
＝特別教室
＝管理系諸室
＝特別支援教室
＝トイレ

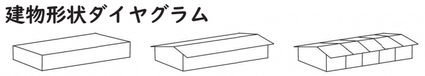


1/900 北立面図

1/900 南立面図

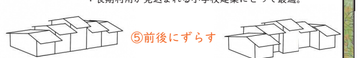
1/900 X 方向断面図

建物形状ダイヤグラム



①原型躯体　②庇をかける　③建物を区切る

②の深い庇をかける効果としては、
・気候への適応（特に高温多湿な日本）　：夏は日差しを遮り、冬は太陽光を奥まで取り込む。
・雨から建物を守る　：雨の多い日本の気候に合っている。
・中間領域の創出（内と外の緩衝地帯）　：自然を内部に取り込んで豊かな空間を創出する。
・建物の長寿命化　：長期利用が見込まれる小学校建築にとって最適。



④高さを変える　⑤前後にずらす

中の空間に有効的に光を通すため、区切りに合わせて建物高さを変える。
さらに、前後に建物をずらすことによって、外と接する壁面率の増加による外部とのつながりの他、上からだけではない光の取入れや、軒下空間の多様性を生ませる。

ずらすことによって現れる「角空間」



ダイヤグラムにあるように、建物を前後にずらすことによって採光を確保するという効果の他に、居心地の良い「角空間」を生成する狙いもある。左の図で赤色の枠で囲まれた空間が生成された角空間である。

立体的にもずらして空間を生成



さらに、高さを上げた躯体の一階部分を空けることによって、平面的な空間だけでなく、立体的に空間を生成する。ファサードに変化を生み出すほか、ピロティー空間という半外部の新たな環境と空間をつくり、お気に入りの空間が見つかる一助となる。

アイソメ図

屋根面
二階面
一階・敷地面

